

江戸 9月

今月の江戸しぐさ「お天道さま」

日本人は、お天道（てんと）様、お月様と呼ぶように、自然物を畏怖と敬愛の念をもって受け止める感性をもつ民族でした。

「お天道さま」は古来からあった神道の天照大神太陽信仰と、仏教の大日如来が習合したもので、すべてを見通す超自然の存在と認識されました。

これと、江戸時代さかんであった陽明学（儒教の一派）の自分を律する考え方が加わり、「お天道さまがお見通しだよ」の観念が強化されました。

現代より、はるかに高い道德観念に支配されていた江戸時代では、世間に顔向けできないことをすることを「お天道さまが見ている」として自分を律する観念が強くありました。

その中で、現代人にほぼ忘れ去られていることに「卑怯」を忌み嫌う観念があります。現代は、”立場の強いものが弱いものを” ”集団が個人を些細なことではじめめる” ”それを見て見ぬふりをする” という卑怯があたりまえの世の中になってしまいました。

病院はモラルが大切な職場です。モラルが低いと患者さんの生命がおびやかされるからです。いじめはモラルが低下する大きな誘因となります。当院はいじめのない、それを忌み嫌う職場でなければなりません。

（人をいじめる人”意地悪をする人”はお天道さまが見ている、それなりの人生しか与えていないことをその人は知りません。）



大根と幼児

※江戸思草は、江戸時代の町民が良いとされること、悪いとされることなどの生活の規範としていたものです。

判断の基準は粋かどうかだったようです。

粋の概念は武士の武士道に対抗するものだったという説があります。他の国にない、一般庶民の高度な精神性が、当時日本に来た外国人に驚きをあたえていたことが多数記録されています。

ヘレン・ハイド

Helen Hyde(1868~1919)

日本を愛したアメリカ人版画家。

江戸の風情が強く残っていた明治期に10年以上滞在し、女性の視点から愛らしい子供の作品をたくさん残してくれました。

当時の外国の観察者の多くが、西洋諸国と子供の様子や子育ての考え方が根本的に異なっていることに驚いていました。

